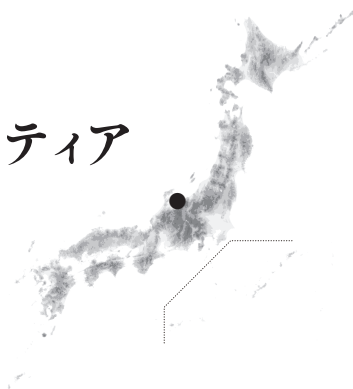


【北陸】

SEP 聖高エコプロジェクト・里山整備ボランティア

～生物多様性空間を保全管理する地域のしくみづくり～



地 域：石川県加賀市

実施主体：石川県立大聖寺高等学校

報 告：石川県立大聖寺高等学校 環境教育担当教諭 三津野 真澄

1. はじめに

石川県立大聖寺高校は、明治44年に江沼郡立実科高等女学校として創設され、石川県立大聖寺高等女学校（大正12年）を経て、昭和23年に現在の名称となった。1学年6クラス、全校生徒713名、教職員53名で、本年創立100周年を迎える全日制普通科高等学校である。

石川県の南端、加賀市大聖寺の町中に位置し、大聖寺川、錦城山、加賀海岸など自然環境に恵まれた立地条件となっている。

2002（平成14）年度に全校あげての環境保全プロジェクト「SEP 聖高エコプロジェクト」を立ち上げ、2004（平成16）年1月、以下の「大聖寺高校環境理念」を決定した。8年目の今も、ますます発展中である。

美しい地球環境を保全し次世代に継承してゆくことは、人類共通の課題です。私たちは、地球環境に対する高い見識を持ち、行動力を備えた「地球市民」となることが強く求められています。

石川県立大聖寺高等学校は、聖高エコプロジェクト（SEP；Seiko Eco Project）を通じて、全職員が積極的な環境教育活動を実践し、生徒を地球市民として育成する学校づくりに取り組みます。その成果を生かし、環境保全と環境負荷低減のための活動を通じて、地域社会に貢献します。



生徒による間伐作業の様子

SEPには3つの環境目標と2つの行動項目が設定されており、全校でその実現に向かって取り組んでいる。

3つの目標

- 1) STOP 地球温暖化！エネルギー消費量、ゴミ排出量、水と紙の使用量、CO₂排出量を前年度比で毎年5%ずつ削減します
- 2) 環境に配慮してグリーン購入に努めます
- 3) 地球環境を考えて行動できる生徒を育てる教育活動を行います

2つの行動項目

- 1) 毎日の学校生活をエコに……エコスクール活動で環境負荷を減らそう
- 2) 故郷の山を守ろう……里山整備ボランティア
本稿では、2)の里山整備ボランティアについて報告する。

2. 「故郷の山を守ろう!」里山整備ボランティア 活動の場、三谷地区について

大聖寺の町から南へ約4kmにある三谷地区は、曾宇(そう)、直下(そそり)、日谷(ひのや)の三町からなる。大聖寺川の支流の三谷川を遡っていくと、川は地区の入口(ここまでの距離が4km)で3つの流れに分かれ、それぞれ曾宇、直下、日谷の谷へと入っていくので、「三谷」という地名がぴったりの地理である。3つの谷を隔てている山地は比較的急峻な地形であることから、各種開発から難を逃れて森林が残されている。古来より炭焼きが盛んに行われ、また戦後はスギ・ヒノキ類が一部に植林された、典型的な里山である。3つの谷を流れる川は各集落より上流には人家が無いことから、良好な水質が保たれ魚影もしばしば見られる。3本の川の共通の水源地は標高548mの刈安山である。

三谷地区は大聖寺の町から約4kmと比較的近いにも関わらず、間にJR北陸線と国道8号線があることから、三谷地区内での地域的連帯が強いのが特徴である。また3本の川が出合う地点に位置するのが三谷小学校で、地域のシンボリック存在となっている。

戦前は炭焼きや林業で経済的に潤い活気があったようだが、戦後は炭焼きの衰退にともない人口も減少して約半減。同時に高齢化が進行し、次第に山が荒廃するようになる。戦後に植林されたスギ・ヒノキ林の間伐が進まず、放置された山地も目立っていた。日本の里山がたどる歴史をそのままこの三谷地区でもたどっていると言えるだろう。そして2004(平成16)年7

月に発生した集中豪雨では各地で斜面崩落が相次ぎ、直下川は氾濫して人家に被害を及ぼすに至った。山の荒廃が原因と語る地元の方は多い。

3. 活動のきっかけ

大聖寺高校では、2002(平成14)年6月、「いしかわ学校版環境ISO制度」が開始された初年度に認定申請することを決定し、「聖高エコプロジェクト(SEP)」を開始した。そして同時期に、県事業である「いしかわの子ども環境教育推進事業」のうちの「環境活動推進校」へ応募することになった。事業目的として、「生徒の実践力を育成するため、生徒会やボランティアグループが主体となって企画・運営する環境実践活動を推進する」とあった。県へ提出する企画書を書くにあたって、「本校としてどのような活動が可能であり、また適しているか」と思い悩んだことを覚えている。そして思いついたのが、地域の森の再生であった。

当時、大聖寺高校に非常勤の学務員として勤務されていた西野氏は直下町在住であり、ご自身も林業に携わり、山仕事全般に詳しい方であった。彼から常々里山が荒廃していること、人工林も手入れされないまま放置されていること、高齢化して人手が不足していること等をお聞きしていた。

「元気な高校生の力を里山再生に活用できるかもしれない」、そう考え、「故郷の山を守る活動：里山整備ボランティア」を企画書に入れて県に提出した。幸いに指定校に選ばれ、里山整備ボランティアが開始される運びとなった。



校内では節電・節水に取り組む



校内のごみ排出量も記録し分析している

4. 活動の方法と内容

2002年から8年間の活動一覧を示したのが、表4である。

(1) 活動日

初年度（2002年度）は、6月という年度途中でのスタートとなったため、日曜日あるいは土曜補習の午後に、ボランティア生徒を募って作業を行った。3回の活動も無事に終了し、指定されていた「環境活動推進校」も終了した。しかし里山整備ボランティアは継続することになった。理由は生徒が生き生きと活動し、地域貢献ができている本事業を辞める理由は無い、ということであった。

2年目からは「生徒SEP委員会」が組織として結成され、全クラスから生徒が集まってくるようになった。部活動への影響を少なくするため、定期考査の最終日の午後（授業は無く放課）を活用して、5月、7月、10月の年3回実施とし、学校の年間行事計画に組み込むことにした。この方式が定着し現在に至っている。

(2) 参加者

生徒参加者については原則的に1・2年生のSEP委員は全員参加とし、一般生徒にもオープン参加としている。野球部、男子テニス部、ESS部、科学部などは毎年部単位で参加がある。本ボランティアがあるからSEP委員会に入ってくる生徒も多く、欠席はほとんどみられない。

(3) 活動場所

スタート当初は先述した西野氏の所有地を中心に、依頼があった山で行っていた。3年目（2004年度）からは活動範囲を広げ、人工林から広葉樹林への復元をすすめる福島氏に協力する形で作業することになった。5年目（2006年度）にはNPO「石川フォレストサポーター会」からの依頼もあり「あおだもの森」に活動場所を移した。

また6年目（2007年度）には三谷小学校からの依頼で、学校裏の学校林の整備を開始し、毎年1回実施することになった。整備活動の後には小学生との交流会が開かれ、生徒達は毎回とても楽しみにしているよ

うである。

7年目（2008年度）にはこれまで活動してきた直下町から初めて離れ、曾宇町の寺尾観音山の整備を開始した。寺尾観音山は山頂にお御堂があり観音像が祭られている。山の歴史は長く、観音像は地元の誇りである。しかし整備する人が不足し登山道沿いや山頂付近には草や不要木が目立つようになってきているため、町から大聖寺高校へ整備の依頼が行われた。

最近2年間は、5月：寺尾観音山、7月：直下町「あおだもの森」、10月：三谷小学校、というスケジュールで活動地が定着している。

(4) 活動の日程と内容

実施日程は概ね以下のとおりである。

- 13:00 学校出発(交通手段:学校のマイクロバスまたは自転車)
- 13:20 実習地到着
- 13:30 説明・ミニ講義①(本日の活動の目的と意義など)
- 13:50 活動①
- 14:30 ALTによる英語でのスピーチ
- 14:40 ミニ講義②(里山の自然、森林の機能、日本の林業、自然観察など)
- 15:00 活動②
- 16:00 片付け・反省
- 16:30 現地出発
- 16:50 学校にてアンケート回答と感想文作成(流れ解散)

作業の内容で、毎回行うのは下草刈りである。地道で重労働だが森を守るための基本的な作業として、毎回最初に取り組んでいる。

その後は、時期と場所に応じて行っている。スギ・ヒノキの人工林では、植林後に手入れされず下枝が繁茂している場合が多いので、下枝打ちを鋸で行っている。また間伐作業も行う。チェーンソーを用いれば速いが、生徒にとっては危険であるため使えない。生徒4名程度が1組になって交代しながらノコギリを引いて間伐する。木を倒すときには危険を伴うので、最初にならず「受け口の作り方」という技術指導をしている。

他には植林、不要木の伐採や撤去、5月には雪で倒れた木を起こす作業（雪起こし）など。寺尾観音山では地元の要望で登山道沿いに合計30本の桜の苗木を植林した。

毎回の活動では休憩をかねて、生徒達にミニ講義を行っている。講師は地元の方、林業従事者の方、NPOの方など様々。テーマは、里山の自然、森林の機能、日本の林業、自然観察などである。また2005年（4年目）に英語教育研究校に指定をうけたことがきっかけで、ALT（英語指導助手）に参加してもらい英語スピーチを行っている。森の中でALTが出身国（米国、豪国など）の森の話や日本の自然の素晴らしさなどについて語るのを聞く生徒達は真剣である。

（5）地域と市民の支え：コーディネーターがカギ

山での整備作業には鋸や鎌を使い危険もともなう。引率教員の人手にも限りがあり、地域の方々の協力は不可欠である。本校では三谷地区在住の、西野氏（2002～2003年）、福島氏（2004～2005年）、山村氏・竹本氏（2006年～）に指導をお願いしてきている。彼らのような、学外のコーディネーターの存在が本ボランティアを継続する大きな鍵であったと思う。

西野氏は先述したように地元で長年林業に携わる一方、本校の元非常勤職員であり本活動には最大限の協力をしてくださった。残念ながら2年後に身体を壊されたが、西野氏から紹介いただいた福島氏は元小学校校長であり、直下町に広大な山林を所有する方である。福島氏は広葉樹が水の涵養に果たす役割

を大切に考え、所有の人工林を広葉樹林に換える試みもされている方であった。生徒たちへのミニ講義でも、里山の大切さを毎回話され、生徒たちは学ぶことが多かったと思う。

5年目となり福島氏から引き継がれた山村氏は、直下町の隣の曾宇町在住である。曾宇町にとってシンボルの寺尾観音山の荒廃を心配していた彼は、町内会と大聖寺高校との共同作業で山を復活させようと考えた。また山村氏は三谷地区唯一の学校の三谷小学校の校友会会長である。小学校の学校林が全く整備されず荒廃していることも心配していて、ここにもボランティアに出掛けることになった。山村氏のおかげで地元のニーズが学校側によく伝わり、整備が本当に必要とされているサイトへ出掛けることができることになった。

そして氏らを通じて森林組合や地元町内会の方々が、生徒への技術指導と安全確保のため、毎回多数ボランティアで参加していただいている。どのような人なのか、どのようにして声がかかり集まってくださっているのか、高校側は全くタッチしていない。しかし毎回それぞれお忙しい中を参加いただき、高校生へ親切に指導してくださっている。本当に感謝にたえない。

また、整備ボランティアが始まった2年目、新聞やテレビで本校の活動が報道された。それを見た一般市民の方々から連絡が入り活動に参加されたり、また大学生のお手伝いがあったりと、毎回いろいろなゲストに参加いただいている。高校生にとって地域や一般市民と一緒に作業はプラスになることが多く、また同時に市民の方に高校の活動を知っていただく点からも、オープン参加型であることは重要だと思う。



下草刈りの様子



地域の方からの指導の様子

(6) 活動運営資金のやりくり

経済的にも市民の方から協力をいただいている。鎌や鋸、ヘルメットなどの購入費用、傷害保険代などを全て学校の予算で行うのは困難なのが現実である。大聖寺高校では、初年度は石川県から環境活動推進校に指定を受け、これらの費用を若干出すことができた。しかし、2年目からはその予算もなくなってしまった。困っていたところ、「国際ソロプチミスト加賀」から助成金の寄付の申し出を頂いた。そして現在までの7年間、毎年援助いただいております、大変ありがたい。ソロプチミストはボランティアを目的に活動しているグループである。毎回の作業の際には必ず数人のメンバーが参加され、熱心に作業に取り組まれている。私たち高校のボランティアを支えるのは、市民ボランティアであると思っております。

2007年度からは石川県で森林環境税がスタートし、同時に「いしかわ森林環境基金事業」が開始された。本校は応募し採択され、これによって技術指導の方々にごくわずかではあるが、薄謝をお支払いすることができるようになった。

また2009年度からは県の事業である「県立学校開放講座」(県教委)および「石川県民大学校」(県立生涯学習センター)の講座としても指定を受け、参加者を公募することとなった。高校が企画する里山整備ボランティアに広く市民に参加いただく形にまで育ってきたといえるだろう。今後も地域や市民との連携をはかりながら、継続していきたいと考えている。

5. 結果

(1) 結果概要

過去8年間の実施結果を表4に示す。22回実施し、参加者の延べ数は、生徒700名、引率教職員146名、指導者および一般市民161名の、合計1007名、また整備した森林面積は約200haである。三谷地区全体の森林面積を考えると、微々たる面積である。しかし年3回、1回3時間余、しかも作業に慣れない生徒と考えれば、まずまずの成果ではないだろうか。

何よりも8年間無事故であったこと、地元の方から喜んでもらえたこと、参加生徒の満足度が大変高いことが成果と思う。

(2) 生徒アンケート調査より

ボランティアの後には毎回参加生徒を対象にアンケート調査を行っている。2009年7月実施の結果から一部を紹介する。(回収数は39)

質問1：里山整備ボランティアに参加してどのように感じましたか。

ボランティアに参加できて充実感を感じた	97(%)
充実感はなかった	0
わからない	3

質問2：里山整備ボランティアは楽しかったですか。

とても楽しかった	29(%)
楽しかった	66
つまらなかった	2*
とてもつまらなかった	0

*テスト最終日であり疲れていたため

質問3：今回の作業についてどのように感じましたか。

地元貢献ができてよかった	100(%)
よくないと思う、あるいは分からない	0

質問4：今回のボランティアは半日という短い体験でしたが、あなたにとってどのような影響や可能性があったのでしょうか。次の中からあてはまるものを全て選んでください。(複数回答可)

森や林業について考えるきっかけになる	25人
地球環境について考えるきっかけになる	11
環境の保全について考えるきっかけになる	13
ボランティア活動について考えるきっかけになる	26
自然を知り自然に親しむきっかけになる	25
進学や職業選択を考えると、役にたち参考となる	3

質問5：感想を書いてください。

○生徒(1年女子)

今回のボランティアに初めて参加しましたが、とても充実した活動を楽しくできたと思います。活動を通じて初めて自然について考えることができました。また間伐について、私はこれまで木を倒すのは悪いことと思っていましたが、森を守るためには必要な作業だと初め

て知りました。

○生徒(2年女子)

すこしでも地域のために貢献できて良かったと思います。また自然に触れる良い機会でした。自分で植えた木が年を重ねるごとに大きくなっていくかと思うと、とても嬉しい気持ちになりました。自分たちで植えた木が将来豊かな森になってくれればと夢を感じました。

○生徒(2年女子)

下草刈りと間伐が本当に楽しかったです。服が凄く汚れてしまいましたが、それが気にならないくらいに楽しかったです。間伐は初めてでとても緊張しましたが、知らない人とも協力でき新しい友達も出来ました。いつも山の整備をされている人のご苦労が分かりました。

○生徒(2年男子)

地元の小学校の学校林ということもあり、一生懸命に取り組んだ。久しぶりに自然と触れ合うこともでき、自然の素晴らしさ大切さを理解できたと思う。これからはいろいろなボランティアに積極的に参加していきたい。

多くの生徒は、活動前は「テスト勉強で疲れている、草刈りなんて辛そう」と否定的な気持ちを持っている。しかし作業後には、「重労働で大変ではあったが充実感や達成感を感じた」ということがアンケートから読み取れる。さらに自然環境や里山保全についての理解が深まり、次への行動意欲に通じている。ボランティア活動への第一歩となっていることもわかる。

6. 課題および他校への広がりの可能性

(1) 8年間を振り返っての課題

他校では定期考査の午後も授業を行っているところもある。地域の進学校として保護者や地元から期待を受ける本校としても授業時間の確保は重要な課題であり、「ボランティアより補習授業」などという日がくる危険性も否定できない。里山整備ボランティアの意義と成果を正しく評価して次年度に続けていくことが重要である。

また引率教職員の確保にも課題が残る。現状ではSEP担当の総務課の教員がもっぱら引率の中心とな

っている。各種会議や定期考査の採点業務で忙しい中、なんとかやりくりして引率しているが、学校内での人的余裕が欲しいと毎回思う。

8年間、軽度の外傷を除いて幸いに事故は起こっていない。しかし間伐や枝打ち作業、急傾斜地での下草刈りには危険が伴う。引率教職員および指導者の方々は生徒の安全管理に心を砕いているが、何が起こるか毎回不安である。安全管理に対する要求が高まっている昨今の風潮を考えると、保護者にも参加をお願いして引率者を増員することも検討が必要である。

実は、これまで保護者へボランティアの実施報告はしてきたが、参加を呼びかけたことはなかった。これは反省点である。生徒の心身の育成は、家庭・学校・地域の三者連携のもとで行われるものである。保護者に生徒たちが一生懸命活動している姿を見ていただき、保護者の理解と協力を仰ぎたいと思う。

経済的な問題は、学校外からの協力と県事業への参加という形でクリアできてきた。しかし両者とも今後も継続される保証はない。学校独自の予算を打つことも難しく、毎年綱渡りの気分である。

(2) 里山整備ボランティアを実施するために必要な項目・条件は？

課題はいろいろあるが、ボランティア作業を終えて帰校する生徒達の輝く笑顔が、本当に素晴らしい。生徒達は「自分が地域のために役立った」という充実感で胸を膨らませ、誇らしげな表情である。加賀市三谷地区に限らず石川県内どこでも荒廃した里山はみられ、各高校からそれほど遠くないところにある。他校でも里山整備ボランティアに取組んでいただけたらと思う。そこで、開始するにあたって必要と考えられる事項や条件などについてまとめた。

項目	必要な条件など
生徒	最初から意欲・関心が高い必要は無い。とりあえず参加してくれる生徒であれば良い。ゼロから有志を集めるのは大変なので、本校のSEP委員会のような、エコ活動を行っている委員会やグループ、部活動などを主体とすると良い。「作業は大変だったけれど楽しかった」という噂が広がると、次第に参加生徒は増えてくるはず。
指導教諭	里山整備の意義を理解し、活動を開始し運営するモチベーションを持つ人。最も重要かもしれない。転勤に備えて、何人かのサポート役の教諭を育成しておくことが継続のための必要条件。
学校長	活動の意義を理解し、「組織全体として取組む」と方針を決定できる人。しかしひとたび「学校行事」として定着してしまえば、後任の校長は「前年どおりの活動」と考え、すんなりと継続されていく可能性も大きい。つまり理解ある校長のうちに「定例学校行事」としてしまうことが重要。
活動サイト	学校に比較的近いこと、できれば生徒が自転車でいける距離がベスト。崖や急傾斜地、軟弱地盤などでないこと。後に述べる地域の賛同が得られ応援が期待できるところが良い。
コーディネーター（指導者）	指導教諭とともに重要項目。活動地域に顔がきき、土地勘があり、人的ネットワークを持っている人。明るく生徒と接することができ、学校の教育方針を理解している人。数年間にわたり継続した指導ができることが必要。
予算	ノコギリ、鎌、ヘルメットなどの購入費、現地への交通費（学校所有のマイクロバスを使用すれば燃料代だけ）、生徒の傷害保険、指導者への謝金（薄謝でよい場合が多い）、飲食代（作業後に飲み物が出ると生徒は大喜び）。なかなか学校独自でこのための予算を確保するのは難しいかもしれない。近年は「里山整備」を目的にした公的・私的援助があり、応募すると良い。
地域・町内会および住民	活動サイトの所有者や近隣の住民の方々。コーディネーターの声掛けで集まってくださるような人間関係が築ければ最高。危険な作業を広い範囲で行うため、学校関係者だけでは安全管理上限界がある。サポート役として期待される。
保護者	生徒の活動を理解し協働できる存在。安全管理のお手伝い役としても期待される。保護者の参加が進めば学校行事として確固たる存在感がつけられるだろう。
行政・公的機関	具合よい活動サイトが見つからない場合は県や市町村所有地で活動すると良いだろう。行政を窓口にして応援役のNPO・NGOの紹介を依頼できる場合もある。また森林組合などが参加してくだされば、技術指導が期待できる。
活動時間	昨今の学校は誠に忙しいので、活動時間をひねり出すのが困難。中高校なら、本校同様に定期試験最終日の午後が取り組みやすい。土日は部活動との兼ね合いをクリアする必要がある。長期休暇も考えられるが、夏休みと冬休みは気候的に、また春休みは年度の変わり目で難しいだろう。とにかく1年目はとりあえず始めてみる、2年目は年間行事計画にしっかり入れておく、この作戦でいくのはどうだろうか。

幸いに大聖寺高校では上記ほとんどの項目で、必要な条件を（程度の差はあるが）満たすことができ、8年間続けることができた。誠に幸運であったと思う。

(3) 石川県立金沢桜丘高校の事例紹介

ここで他の事例として、石川県立金沢桜丘高校の取り組みを紹介したい。

桜丘高校はSEA（桜エコロジーアクション）の一環として、平成20年度より金沢市の夕日寺健民自然園で笹刈りや竹伐採を行っている。年2回（5、10月）、定期試験最終日の午後、「石川県里山保全リーダー会」会員の指導のもと、環境委員および有志生徒40～70名が参加している。参加生徒のアンケート結果では、45%の生徒が「とても楽しかった」と回答し、充実した活動であるらしい。またその紹介記事を掲載した学校新聞は、全国の新聞コンクールでも受賞している。指導教諭の柳生敦志先生は、「SEA」という保護者向けの案内パンフレットのなかで、この活動を写真入で紹介され、対外的な広報も適切に行っておられる。

桜丘高校では活動を始めるにあたって、石川県自然保護課へ相談に行き、活動場所、道具、指導者を斡旋されたと聞く。大変スムーズなスタートで、成功事例として学ぶことが多い。

現在、学校ごとに様々な問題がある。しかし勇気を持ってまずは学校の外に出かけてみてはどうだろうか。環境問題への第一歩として、里山荒廃という地域の問題を直視することに意義がある。活動へのニーズがあり、生徒にとっても活動の意義が分かりやすい。また地域の人々と一緒に汗を流すことに大きな教育的効果がある。

今後、志を同じくする学校間で交流できれば、嬉しく思う。（生徒の生き生きとした姿を一度見てしまったら、もうやめられない、です!）

7. さいごに…今後にむかって

大聖寺高校のSEPは、「毎日のエコスクール活動」と「里山整備ボランティア」の2本柱で8年間続けてきた。前者は特別なことをしているわけではなく、毎日の

学校生活の中で「ちょっとしたエコ」を続けてきただけである。しかし、もし全国の学校全体で取り組むことができれば、国全体での環境負荷削減量は大きなものとなるだろう。また里山整備もより多くの学校で取り組み、日本の里山問題の解決に一歩踏み出せると思っている。

SEP活動については、これまでに中国、韓国、デンマークで発表し、方法のノウハウをお伝えする機会に恵まれた。今後、海外の学校とも連携して環境教育活動が広げられたらと願っている。

謝辞

8年間の里山ボランティア活動を支えていただいた西野さん、福島さん、山村さん、国際ソロプチミスト加賀、フォレストサポーター会、加賀林業研究会、かが森林組合、加賀市立三谷小学校、直下町町内会、曾宇町町内会はじめ多くの方々に深く感謝申し上げます。エコスクール運動にあたってご指導いただいた安田吉輝氏、石川県環境部にお礼申し上げます。また本稿について、金沢大学鈴木克徳先生およびESD石川の皆様方から有益なご助言をいただきました。ありがとうございました。

表 大聖寺高校の里山整備ボランティア一覧

回数	年	月	日	曜日	場所	参加生徒	引率者	指導者、一般市民	参加者合計数	内 容	備 考
1	2002 (平成 14)	7	14	日	加賀市直下町の里山	14	4	2	20	下草刈り、自然観察、川遊び	午前午後通して実施
2		9	28	土	加賀市直下町の里山	32	3	2	37	下草刈り、枝打ち、間伐、木材の運び出し	
3		10	25	金	加賀市直下町の里山	18	6	2	26	間伐、山小屋作り体験、キノコ採り	作業の合間に大量のキノコがとれ生徒大喜び
4	2003 (平成 15)	5	22	金	加賀市直下町の里山	26	5	2	33	下草刈り、自然観察、山菜採り	国際ソロプチミスト加賀より活動資金援助を頂くことになる。寄付は現在に至る。鋸や鎌などを購入したり、傷害保険代に使用。
*		7	4	金	加賀市直下町の里山	*	*	*	0	*	大雨のため中止、代わりに12月に実施
5		10	24	金	加賀市直下町の里山	20	3	2	25	下草刈り、枝打ち、間伐、木材の運び出し	
6		12	5	金	加賀市直下町の里山	6	4	2	12	間伐、植林、キノコ採り、キノコ汁作り	
7	2004 (平成 16)	5	20	木	加賀市直下町の里山	40	5	5	50	下草刈り、木起こし、自然観察、お話(林業について)	この回以降、毎回森林組合の方々が技術指導ボランティアで来てくださる。
8		7	2	金	加賀市直下町の里山	20	5	4	29	下草刈り、枝打ち、間伐、お話(森の恵みについて)	
9		10	22	金	加賀市直下町の里山	*	*	*	0	*	この秋、全国的に熊が出没し問題になる。直下町でも前日熊が目撃されたため、急遽中止となる。
10	2005 (平成 17)	5	19	木	加賀市直下町の里山	37	8	4	49	下草刈り、木起こし、自然観察、お話(里山の自然について)、英語スピーチ	文科省よりSELHi(英語教育)指定校となり、このボランティアでも外国人指導助手による英語スピーチを実施することにする。現在に至る。テレビ番組の取材を受ける。
11		7	1	金	加賀市直下町の里山	*	*	*	0	*	台風と大雨のため中止
12		10	21	金	加賀市直下町の里山	34	9	6	49	枝打ち、キノコ採り、キノコ汁作り、英語スピーチ(日本の森の豊かさ)	一般市民ボランティアの参加が始まる
13	2006 (平成 18)	5	19	金	加賀市直下町の里山「あおだもの森」	32	8	5	45	下草刈り、下枝打ち、枝打ち、木起こし、お話(日本の森の特徴)、英語スピーチ	地元の要望があり、アオダモやケヤキの植林地での下草刈りを開始。
14		7	4	火	加賀市直下町の里山	33	8	8	49	下草刈り、間伐、川遊び、お話(山を守る方法)、英語スピーチ	
15		10	20	金	加賀市熊坂町の国道8号線拡幅工事現場、加賀市中央公園内の炭焼き小屋	35	9	18	62	雑木林伐採現場の観察、伐採樹木の切断、運搬、炭焼き体験(釜づめ)、お話(8号線拡幅工事について)、英語スピーチ	地元の建設会社から伐採木がもったいなく炭に出来ないか、とのお話を頂き実施。生徒が釜に詰めた後、市民ボランティアの協力により炭を焼き上げた。
16	2007 (平成 19)	5	18	金	加賀市立三谷小学校の学校林(直下町)	37	10	5	52	下草刈り、小学生との交流会、お話(森と水)、英語スピーチ	三谷小学校校友会を通じて整備ボランティアの依頼をうけて実施。学校側から非常に感謝いただいた。石川県で森林環境税が開始され、いしかわ森林環境基金事業に選ばれる(現在に至る)。
17		7	4	水	加賀市直下町の里山「あおだもの森」	29	7	10	46	下草刈り、枝打ち、間伐、川遊び、お話(広葉樹と針葉樹の違い)、英語スピーチ	市民ボランティアの参加が増えてくる。
18		10	19	金	加賀市直下町の里山「あおだもの森」	33	7	16	56	トンネル工事現場の見学(環境学習)、下草刈り、枝打ち	直下町で県道トンネルを建設中のため見学を実施。
19	2008 (平成 20)	5	23	金	寺尾観音山(加賀市曾宇町)	56	8	10	74	下草刈り、登山道整備、植林、不要木の伐採、お話(寺尾観音山の歴史)、英語スピーチ	曾宇町の依頼で寺尾観音山の整備を開始。山頂のお御堂周辺の草刈りを中心に作業を実施。野球部1年生の参加あり。
20		7	2	水	加賀市直下町の里山「あおだもの森」	33	6	10	49	下草刈り、間伐、枝打ち、川遊び、お話(森を育てる方法)、英語スピーチ	市民から果物などの差し入れをいただく。
21		10	17	金	加賀市立三谷小学校の学校林(直下町)	50	10	12	72	下草刈り、不要木の伐採と撤去、階段作り、小学生との交流会、お話(三谷地区の野鳥)、英語スピーチ	男子テニス部や科学部、ESS部などSEP委員以外から広く参加がある。
22	2009 (平成 21)	5	22	金	寺尾観音山(加賀市曾宇町)	32	7	12	51	下草刈り、登山道整備、植林、不要木の伐採、お話(寺尾観音山の歴史)、英語スピーチ	この年度は県立学校県民開放講座もあわせて実施。市民参加者も一緒に作業に汗を流す。
23		7	2	木	加賀市直下町の里山「あおだもの森」	39	7	12	58	下草刈り、間伐、枝打ち、お話(日本の林業)、英語スピーチ	他校からの視察がある。
24		10	16	金	加賀市立三谷小学校の学校林(直下町)	44	7	12	63	下草刈り、不要木の伐採と撤去、階段作り、小学生との交流会、お話(三谷地区の野鳥観察)、英語スピーチ	男子テニス部の参加あり。小学生から三谷地区の野鳥についての発表を聞く。
					のべ参加者合計数	700	146	161	1007		